中学生の学力格差

できる生徒とできない生徒、学力の差が広がる背景とは……

多様な学力層の生徒が一つの教室に集まっている中学校。近年、中学生の上位層と下位層の学力の差がますます広がっているという声がよく聞かれる。教室内の学力格差が広がったために、どの生徒層に中心を置いて授業を進めればよいのか、教師はその判断がしにくく、その結果、授業を成立させるのが難しいというのだ。

現場の教師はどのような原因によって学力格差が起きていると考えているのか。そして、どのような対応策を試みているのだろうか。

「昔も小学校の算数の段階でつまずいている生徒は何人かいたものですが、その数が増えていると思います」

N教諭はその理由として、ドリル学習の減少が大きいのではないかと分析する。これは4月号の本コーナーでも触れたことだが、我々大人が子どもの頃は、かけ算や分数の計算、面積の求め方など、学習の要所は徹底した反復学習で覚え込まされたものだ。だが、今は「子どもの興味を大切にするという新しい学力観の考え方を、先生方がはき違えて理解している」（N教諭）ために、学習の要所ができなくても、次へ次へと進ませているという。課題を出せば自分自身で問題を作るという創造力を発揮する生徒がいる一方で、九九の暗唱やカタカナを書くのさえおぼつかない中学生がいるのは、そのためだ。

また、N教諭は教師の資質の変化も問題だと語る。

「生徒の実態が見えていない、あるいは見ようとしない教師が多くなっています。生徒が授業中に騒いでいても寝ていても、自分の仕事は教科書を進めることだと言わんばかりに自己完結した授業を展開する。自分は自分、人は人という風潮は教師の世界でも強まっています。学習意欲がある子はそんな教師に対してでも一生懸命ついていきますが、学習意欲がない子は脱落していく。学力格差は教師の姿勢が生みだしている側面もありますね」

'93〜'94年に文部省が中学生を対象に実施した全国学力調査の数学のデータがある（27ページグラフ参照）。結果を見ると、40％台から90％台まで、ほぼ台地型の得点分布になっている（＊）。富山県の公立中学校で数学を教えるN教諭は、このデータが示すような学力格差を感じている一人だ。特に、下位層の落ち込みが激しいと言う。中学校入学段階で、当然習得しておかなければならない内容を身に付けていない生徒が目立つと言うのだ。

東京都の公立中学校に勤務するK教諭は、小学校での観点別評価の弊害を指摘する。

「東京の小学校では現在、観点別の絶対評価になっています。観点別評価は子どもの態度や興味関心を基準にした評価なので、学力を反映していません。そのため、子どもも保護者も学力面での成績を正確に把握できないまま、学年が上がっていくことになります。保護者も本人も気が付かないうちに、ほかの子どもとの格差がついてしまっているという可能性がでてきます。中学生になって相対評価の通知表をもらって、初めて学力の低さに驚くわけです」

生活態度の違いが学力格差を生む

学力格差が広がっているもう一つの背景が、家庭生活の変化による生徒自身の意欲の問題だ。N教諭はこう話す。

「中学校段階での学力の差は、日頃の学習態度や生活態度である程度決まります。能力的に劣る生徒でも、生活態度がしっかりしていれば授業についていくことができるのです。しかし、その生活習慣が際限なく乱れている生徒が増えています。教室の中の3分の1ぐらいは、そういう生徒です」

例えば、数学の授業では三角定規やコンパスは必携品だ。だが、何度言っても、持ってこない生徒がクラスに少なからずいる。そこで、N教諭は授業のある前夜に、生徒の自宅に「明日はちゃんと持ってくるように」と電話をかけたことがあるという。するとだるそうな声で生徒の「わかってるよ」という声が返ってきた。

「なんだか元気がないわね。夕ご飯はちゃんと食べた？」

「ポテトチップスとコーラで済ませた」

「お父さんとお母さんは？」

「まだ帰ってない」

生徒のルーズな家庭生活が、電話を通して垣間見られるという。そんな生徒の中には、潜在的には学習能力が高い者も少なくない。だが、勉強道具を忘れがちで、学習に取り組む態度が身に付いていない。言わば学習以前の段階でつまずいている。こうして、生活態度がしっかりしている生徒との間で学力格差が広がっていくのだ。

全員が参加できる授業

学力格差が歴然としている教室の中で授業を進めていくのは、並大抵のことではない。

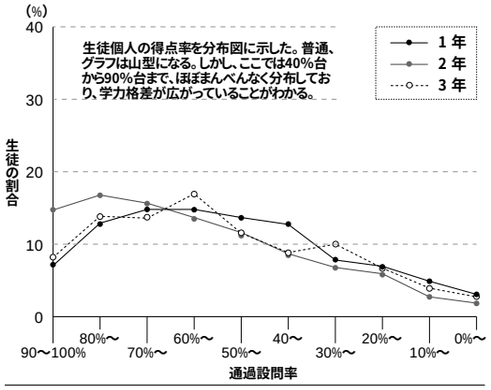
N教諭が工夫しているのは、学力層に関係なく生徒全員を授業に参加させる仕掛けだ。N教諭はその時間に学んだ内容を定着させるために、生徒に1問だけ問題を解かせ、提出させている。その際、必ず2人以上一緒に提出することを義務付けている。1人ずつ提出させると、できる生徒は真っ先に解答して教師に持ってくるが、できない生徒はともすれば解答を最初から諦めてしまう。しかし、「2人以上一緒に」としたことで、理解の早い生徒が、そうでない生徒に教えるという光景が教室中で見られるという。

また、K教諭の担当科目は国語だが、ちょっとユニークな文章指導に力を入れている。自治体などで行っているキャッチフレーズ等の公募に応募するために、授業中の10分間を使って、標語作りにチャレンジさせているのだ。標語なら成績に関係なく作ることができ、時には学力下位の生徒の作品が入選することもある。成績に関係なく、「やればできる」という雰囲気ができあがる。標語作りで文章を書くことに対する抵抗感を和らげながら、作文を書く機会も数多く設けている。やはりコンクールなどへの応募が中心だ。これも時々、授業中に目立たない生徒が賞状をもらうような“事件”が起きる。それが周囲の生徒に波紋を投げかけ、全体を引っ張り上げることにつながるという。

学力格差があるのは事実として、いかにそれを感じさせない授業をするか。それが、現場の教師が取り組んでいる、現状への挑戦だ。

＊の箇所は、久富善之「日本の子どもの学力の現状から『学校知識の魅力よ、よみがえれ』」―『現代と教育VOL.45』（相模書房）所収―の指摘を参考にしました。

中学校数学（学年別）の通過設問数割合別生徒分布



＊文部省（新）学力調査「教育課程実施に関する総合的調査研究」（1993〜1994年度）より